

マックス・クリンガーの油彩画小品《女性の肖像》（一）

古田 浩俊

はじめに

愛知県美術館は令和元年度（2020年）にマックス・クリンガーを中心とする風巻孝男氏旧蔵のコレクションを一括して受贈した¹。その中の1点がクリンガーの油彩画《女性の肖像》（図1）である。日本の公立美術館ではクリンガーの版画は比較的多くの館で所蔵されているが、油彩画を所蔵している館は寡聞にして知らない²。そうした状況を鑑みると、この油彩画は小品とはいえ貴重な作例と言える。

この小品には署名や年記はない。しかし絵の裏面に興味深い書き込みが残されており（図2）、この小品にまつわる歴史の一角を明らかにしてくれている。本論ではこの書き込みを糸口に、この作品に関して考察することとする。



図1 マックス・クリンガー
《女性の肖像》

献呈辞

《女性の肖像》が描かれた板の裏面右下に以下の書き込みがある。

友人ラングハインリヒに
愛しきマックスへの
友情の証に
ゲルトルート・クリンガー
1921年 5月³



図2 《女性の肖像》裏面 右下に書き込み

クリンガーの版画に関してはジンガーのカタログ・レゾネ番号で略記する。Hans Wolfgang Singer, *Max Klingers Radierungen Stiche und Steindrucke*, Berlin: Amsler und Ruthardt, 1909; Hans Wolfgang Singer, *Max Klingers Radierungen Stiche und Steindrucke*, New York: Martin Gordon, Inc. 1978; Hans Wolfgang Singer, *Max Klinger Radierungen Stiche und Steindrucke/ Etchings Engravings and Lithographs 1878-1903*, Sanfransisco: Alan Wofsy Fine Arts, 1991.

- 1 受贈したのは版画を中心とする作品185件（601点）で、そのうちクリンガーの作品は103件（約480点）を数える。クリンガーの研究者でもあった上越教育大学教授の風巻孝男氏（2017年没）は、澤柳大五郎氏の門下生として愛知県美術館の初代館長浅野徹氏や二代目館長長谷川三郎氏とは同門でその後輩という間柄であり、当館が受贈できたのはそうした縁があったからである。古田浩俊「マックス・クリンガー 屈指のコレクション」『AAC』2020年6月25日号、12-13頁を参照のこと。
- 2 全14作の版画シリーズに限れば、公立美術館で全シリーズを所蔵しているのは高知県立美術館のみで、国立西洋美術館が11シリーズ、神奈川県立近代美術館が4、岐阜県美術館、兵庫県美術館、町田市立国際版画美術館が3、豊田市美術館、北海道立近代美術館、青森県立美術館が2、新潟県立美術館、大分県立美術館、熊本県立美術館、静岡県立美術館各1シリーズとなっている。彫刻については、豊田市美術館が大理石に彩色した小彫刻《ミューズの頭部》（1890年以前）を所蔵している。
- 3 Freund Langheinrichen/ freundlichen Erinnerung an/ meinen lieben Max/ Gertrud Klinger/ Mai 1921

この献呈辞からわかることは、1921年5月にゲルトルート・クリンガーが、友人のラングハインリヒにこの《女性の肖像》を贈ったという単純な事実である。さらに言えば、ゲルトルートがこの作品をラングハインリヒに贈ったのは、愛するマックス(・クリンガー)とラングハインリヒが友情で結ばれていたことの証としてであった。

この献呈辞には、順番にラングハインリヒ、マックス(・クリンガー)、ゲルトルート・クリンガーの3人の名前が登場する。そこでまずはクリンガー以外の二人と各人のクリンガーとの関係について明らかにしておこう。

ゲルトルート・クリンガー Gertrud Klinger (旧姓ボック Bock, 1893-1932)

《女性の肖像》をラングハインリヒに贈ったのが、ゲルトルート・クリンガーである⁴。ゲルトルートは、父ヴィルヘルム・グスタフ・アレクザンダー・ボックと母クリシュティアーネ・ベルタ・ルイーゼ(旧姓ヨジガー)との間の7人兄弟の下から2番目の娘として、1893年12月4日にライプツィヒで生まれた。父親は屋根葺き職人で、家庭は決して裕福ではなかった。家族はモルトケ通りから入った家の2階に住んでいた。兄弟の一人クルト・ボックは、後に2度ライプツィヒのプラークヴォッツ地区にあったクリンガー家の管理人を務めることになる。ボック家は夏休みをナウムブルク近郊のレーバッハ・アン・デア・ウンシュトルートで過ごすことにしていた。この町はクリンガーのアトリエのあるグロースイエーナの南西約3kmにあり、徒歩でも30分程度の距離であった。1910年に母親と避暑に来ていたゲルトルートと妹のエーラは、まったくの好奇心からグロースイエーナのヴァインベルクにいた、ライプツィヒの芸術家として名を馳せていたクリンガーの元を訪問した。その後、母親は二人の娘ゲルトルートとエーラをクリンガーの元にモデルとして通わせ、ゲルトルートはグロースイエーナを頻繁に訪問するようになる。旧風巻コレクションにはゲルトルートがモデルと思われる素描があり、年記によればこの年の8月10日に描かれている⁵(図3)。クリンガーは、ブルガリアの外交官の元夫人でウィーン出身の作家エルザ・アゼニエフ(1867-1941)を1898年から1912年頃までのおよそ15年間伴侶としており、1900年には彼女との間に娘デジレー・オットィマ・クリンガーが生まれている。クリンガーとゲルトルートとの関係が深まるにつれ、気難しく嫉妬深いアゼニエフとクリンガーの関係はどんどんと冷めていき、二人は正式に結婚することもなく1916年に最終的に決別してしまう。

ゲルトルートはクリンガー晩年の約10年間、彼のミューズであった。二人は1919年11月



図3 《女性の頭部》1910年、黒チョーク・グアッシュ、紙、57.6×34.4 cm (FD201900004000)

4 ゲルトルートに関しては、以下を参照した。Richard Hüttel, Max Klingers letzte Muse Gertrud Bock, in Richard Hüttel und Hans-Werner Schmidt (Hrsg.), *Max Klinger „...der moderne Künstler schlechthin“*. *Schriften des Freundeskreis Max Klinger E. V. Band 2*, Berlin-München: Deutscher Kunstverlag, 2010, S. 158-166; <https://www.mv-naumburg.de/das-weinberghaus>

5 画面右下に“10. aug 10”の年記がある。ヒュッテルによれば、ゲルトルートをモデルにした最初の習作素描に“1910.3.17”の日付があるというが、筆者は未確認である。*Ibid.* S. 159.

に結婚している。クリンガーは翌20年7月に没するので、二人の結婚期間は1年にも満たなかった。この間1920年4月にはゲルトルートはクリンガーの唯一の遺産相続人となっている⁶。書き込みにある1921年5月は、クリンガーが没して10か月ほど経った時期にあたり、この小品もゲルトルートが相続したもののひとつであったはずである。彼女の所有物であったからこそ他人に贈ることもできたわけである。

ゲルトルートはその後、クリンガーの友人の彫刻家で、クリンガーの遺品整理に関わったヨハネス・ハルトマン(1869-1952)と、クリンガーが没して約2年後の1922年5月に再婚する⁷。《女性の肖像》をラングハインリヒに贈ったちょうど1年後のことである。ゲルトルートはハルトマンと10年程結婚生活を送るが、38歳の若さで1932年に没している⁸。

フランツ・ラングハインリヒ Franz Langheinrich (1864-1945)

ゲルトルートから《女性の肖像》を贈られたフランツ・ラングハインリヒは、ライプツィヒに生まれ、ミュンヘンとガウティンクで暮らした小説家・詩人である。とりわけミュンヘンの雑誌『ユーゲント』の編集者の一人として知られている。クリンガーの年譜をたどると、ラングハインリヒの名前は、1920年7月8日のクリンガーの葬儀の際に弔辞を述べた人の一人として登場する。「ヴァインベルク(葡萄山)におけるクリンガーの埋葬で弔辞を述べたのは、ライプツィヒ大学を代表してフランツ・シュトゥドニツカ、ライプツィヒ市を代表して市長カール・ローテ、ライプツィヒ美術館を代表してユリウス・フォーゲル、ベルリン美術アカデミーを代表してヒューゴ・リヒト、自由分離派を代表してケーテ・コルヴィッツ、ミュンヘンの『ユーゲント』を代表してフランツ・ラングハインリヒとオットー・グライナー未亡人⁹、ドレスデンのアカデミー評議会を代表してロベルト・シュテール、ライプツィヒ・グラフィックアート・アカデミーを代表してユリウス・ツァイトラーであった。』¹⁰

『ユーゲント』はゲオルク・ヒルトを発行人に、フリッツ・フォン・オステイニが編集者となり、芸術と生活のための週刊誌として1896年にミュンヘンで創刊された。その創刊号には、美術分野の寄与者として、クリンガーもベックリン、コリント、レンバッハ、スレフォークト、シュトゥック、トーマ、トリュブナーなどとともに名を連ねているので、クリンガーは当初からこの雑誌と関係があった。ラングハインリヒは当初から編集者として関わっていたわけではないが、発刊10年後の1906年の第45号にクリンガーの《イタリアでの習作》¹¹のカラー図版が掲載された号では、オステイニ、ジンツハイマー、マタイ、エトリンガーとともに編集者の一人として名を連ねている。

6 ゲルトルートとクリンガーの基本的な関係については以下を参照のこと。Herwig Guratzsch (Hrsg.), *Max Klinger, Bestandskatalog der Bildwerke, Gemälde und Zeichnungen im Museum der bildenden Künste Leipzig*, Leipzig: E. A. Seemann Verlag, 1995. S. 31-47 (Biographie).

7 ハルトマンはクリンガーの墓をデザインし、墓の入り口に立つクリンガーとゲルトルートを表した2本のヘルメース柱を制作した。

8 ゲルトルートに先立たれたハルトマンは、彼女の妹でクリンガーの全遺品の相続人であったエーラと再婚している。

9 オットー・グライナー(1869年ライプツィヒ生まれ-1916年ミュンヘンにて没)はドイツ象徴主義の画家で版画家。1891年にイタリアで12歳年上のクリンガーと知り合い、師として心酔するようになった。

10 Guratzsch (Hrsg.), *op. cit.*, S. 47.

11 *Studie aus Italien*, Max Klinger [Leipzig], *Jugend*, 1906, No. 45, S. 963.

ラングハインリヒは1907年にライプツィヒで詩集『人生について』を刊行する¹²。この本の挿図や挿絵にはクリンガーとオットー・グライナーが関わっており、表題頁にもそのことが記されている(図4)。『ユーゲント』を離れたところで、ラングハインリヒとクリンガーの関係を伝える貴重な資料である。クリンガーの名前は美術面で寄与してもらった人として記載されてはいるものの、20点を超える挿図のほとんどすべてはグライナーの手によるもので、クリンガーの作品は全頁大で複製された《公園で》が挿入されているだけであった¹³。ラングハインリヒとしては、自分の詩集に1点でもよいからクリンガーの作品を何としても入れたかったのであろう。クリンガーとグライナーの関係性を鑑みれば、表題頁にクリンガーの名前がグライナーよりも先に記されているのは当然ではあるが、内容からすれば、グライナーが圧倒的に主役なのでグライナーの名前を先にもってきてもよさそうなものである。そこをあえてクリンガーを先にもってきたところに、ラングハインリヒのクリンガーに対する敬意の現れを見ることができるであろう。

さて、『ユーゲント』では1909年までにクリンガーの図版が23点使用されている¹⁴。とりわけ1907年の第8号はクリンガーの生誕50周年を記念した特集号で、クリンガーの《自画像》が表紙にカラーで使われ(図5)、《ファンタジーと芸術の子供》、《泉》、《サイレン》、《ライラック(水彩スケッチ)》がカラーで、《大審問官の前のキリスト》、《甲騎兵とサロメ》、彫刻《ガラテア》がモノクロで、計8点の図版が掲載された¹⁵。この号においても、ラングハインリヒはオステイニ、ジンツハイマー、マタイ、エトリンガーとともに5人の編集者の一人として名を連ねている。



図4 フランツ・ラングハインリヒ『人生について』1907年、ライプツィヒ



図5 『ユーゲント』1907年、第8号、表紙

12 Franz Langheinrich, *An das Leben*, Leipzig: Verlag von E. A. Seemann, 1907.

13 *Ibid.*, S. 76. 版画集『ある愛』(1887年刊)のための1点で、最終的には版画集には入らずに棄却された版(Singer 168)。

14 Georg Hirth (Hrsg.), *Dreitausend Kunstblätter der Münchner "Jugend" Ausgewählt aus den Jahrgängen 1896-1909* [Neue vermehrte Auflage], München: Verlag der "Jugend", 1909, S. 177-180.

15 *Jugend*, München, 1907, No.8. キャプション及び注意書き(S. 150b)による8点の作品の詳細は以下の通り([]内は筆者の補足)。《自画像》:作家蔵、ライプツィヒ/《ファンタジーと芸術の子供》:フリッツ・グルリット氏蔵、ベルリン[エッチング《グルリット画廊の展覧会案内》(1881年、Singer 262)の上半分] /《泉》:油彩画、220×125cm、ヴィルヘルム・ヴァイガント氏蔵、ミュンヘン/《サイレン》:油彩画、185×100cm、エリーゼ・ケーニヒス嬢蔵、ベルリン[別名「トリトンとネレイデス」1895年、ヴィラ・ロマーナ、フィレンツェ] /《ライラック》:水彩スケッチ/《大審問官の前のキリスト》:素描、ライプツィヒ美術館蔵、ユリウス・フォーゲル教授の善意による[Inv.-Nr. NI. 2553] /《甲騎兵とサロメ》:素描、ゲオルク・ヒルツェル氏蔵、ライプツィヒ[《甲騎兵の帽子を被ったサロメ》1886年、ミュンヘン国立版画素描コレクション] /《ガラテア》:銀像[1906年、ライプツィヒ美術館蔵、Inv.-Nr. P 413]。

献呈の時期

ラングハインリヒ、マックス・クリンガー、ゲルトルート・クリンガーの3人の関係がわかれば、ゲルトルートがラングハインリヒに《女性の肖像》を贈ったとしても何の不思議もない。それでは何故ゲルトルートは1921年5月という特定の時期にこの作品を彼に贈ったのだろうか。実はその前月4月1日に、週刊誌『ユーゲント』の1921年第14号が発行されており、この号はクリンガー没後初のクリンガー特集号であった(図6)。表紙は1920年の自画像で、これを含めて10点の図版が使われた。版画《プロメテウスの誘拐》、油彩画《庭園》、素描《妖精》、油彩画《1874年カールスルーエ・アカデミーのマックス・クリンガー》、油彩画《「磔刑」のための習作》、油彩画《画家の母親》、パウル・ホルスト＝シュルツェによる素描《死の床のマックス・クリンガー》、彫刻《ベートーヴェン》、油彩画《バーデンの農家》である¹⁶。このうち油彩画を中心に6点にカラー図版が使われた。記事は3本掲載され、巻頭を飾ったのがフランツ・ラングハインリヒの「プロメテウスの帰郷、マックス・クリンガー追想」であった。その他、ハイデルベルクのカール・ノイマンによる「マックス・クリンガーの作品について」とマックス・クリンガーの「芸術論」が掲載されている。ラングハインリヒはもちろんこの号でも編集者の一人であり、クリンガー没後9か月のこの時期に特集号を自ら主導した可能性が高い。

さらに重要なのは、ラングハインリヒがクリンガーに捧げた詩が巻頭を飾っていることである。頁の上半分にはクリンガーの版画集『ブラームス・ファンタジー』(1894年)の第24葉《プロメテウスの誘拐》(Singer206)が大きく掲載されている(図7)。裸で仰向けになったプロメテウスは、ヘルメースに脚を抱えられ、ゼウスの鷲に腕を掴まれている。彼らが飛んでいるのは海辺の上空で、遠景には雪を頂く山が見えている。神話によれば、人類に火を渡したプロメテウスは、ゼウスの怒りを買ってカウカーソス(コカサス)山で磔にされ、生きながらにして毎日肝臓をついばまれることになる¹⁷。

頁の下半分には、詩のタイトル「プロメテウスの帰郷」とサブタイトル「マックス・クリンガー追想」の元に、四行連の詩が計14連、3段(12連)と2段(2連)に組まれている。以

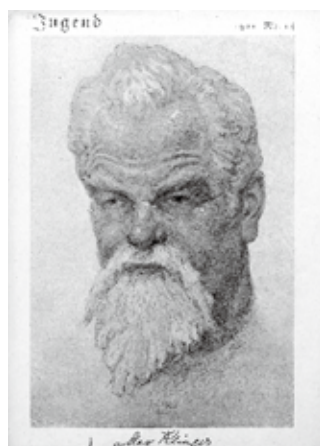


図6 『ユーゲント』1921年、第14号、表紙



図7 『ユーゲント』1921年、第14号、314頁

16 《プロメテウスの誘拐》：版画集『ブラームス・ファンタジー』(1894年)より(Singer 206)／《庭園》(カラー図版)／《妖精》：素描／《1874年カールスルーエ・アカデミーのマックス・クリンガー》(カラー図版)：ミュンヘン／《「磔刑」のための習作》(カラー図版)：1884/85年、ライプツィヒ美術館、Inv. -Nr. 1287／《画家の母親》(《母親の肖像》カラー図版)：1893年頃、ライプツィヒ美術館、Inv. -Nr. 1292／パウル・ホルスト＝シュルツェ《死の床のマックス・クリンガー》／《ベートーヴェン》：1902年、ライプツィヒ美術館、Inv. -Nr. P 28／《バーデンの農家》(カラー図版)

17 続く第24葉(Singer 207)では、玉座に座るゼウスの足置きとしてプロメテウスが縛られた岩山が表される。

下に試訳する。

露と黄昏のうちに大地の鼓動が響く。
暗がりから恥ずかしげもなく陽は昇り
悲しみに打ちひしがれながら
彼は雲一つなき太陽の門をくぐって足を踏み入れた。

灰色の岸辺で夢見た船長は
物思いに耽るように渡し舟の上に身を屈め
丘の上でためらいがちに続く波が
かすかに煌めいたとき、びくっとした。

ためらう者たちだけが、光を通した手を光らせ
早朝の陽が窓に触れた。
そこには誉れ高き巨匠が、^{マイスター} ^{ヴァインベルク} 葡萄山の無言の壁に囲まれて
棺台の上に横たわっていた。

はればれとした表情で、安らぎに満ちた顔
瞳の奥底に火を灯すとき
この世から旅立った巨人は^{タイタン}
あまねく天に美を与えてくれた。

片方の手は、ここにすべての征服者を押し込み
その手が彼自身を花の鎖で縛りあげた。
朝の薔薇色の指よりも美しく
神は雲からの松明を運んできた。

時は明るく流れ、時間は震えながら流れる
遠くの大聖堂から真昼の空気を伝わって。
別の巨匠は敬虔な口を開き
兄弟に永久に叫ぶ。

その後、胸をふさぐ沈黙が不安に向かう
彼の目が緑に輝く野辺から。
見よ、昼に上り晩に降りる
今は朝からの重苦しい灰色の空。

丸天井の上に巨大な丸天井が生まれ
切り石の建築が高く積みあがる。

塔の周りの塔が勇壮かつ華麗にそびえ立ち、
崩れ落ち、青空に向かってさらに勇壮に建ちあがる。

夜の灯火と昼夜が入れ替わり
空色と黒が急に押し寄せる
世界の陶醉のうちに大神の目がぐるぐる回る
ポタウン合唱団が万物にそれを告げる。

彼の諸手から金の炎が飛び出す
夜には彼の雷鳴が、彼らを尻込ませる
激しく喘ぎながら世界は崩壊する
と突然燃え上がる、彼の力の犠牲者たち

地球の谷間から立ちのぼる三つの恐怖の火
天命を授かった人間が住むところに
三つの屋根、東の間のかげがいなき存在に
立ちのぼる炎の煙と真っ赤な灼熱の中で。

そこで式典らしさが和らいで
天空にチューバの合奏が消えてゆく。
しかし闇の帳をまだ長く吹き流し
丘の麓あたりで火は大きくなってゆく。

最後の時にまだ風が吹く
涼しい夜の前の夕べの灯に
彼女が暗い土の底に棺を
花と涙で送ったとき

星がひとつ煌めく。天気はおさまり
彼の毛皮は肌の上で閉じられる
パンが現れ「神々よ、彼を連れて帰ったのか？
天から火を持ち去った者を」

3連まで読み進むと、「巨匠」^{ヴァインベルク}「葡萄山」「棺台」の言葉から、この詩はラングハインリヒが弔辞を述べたクリンガーの葬儀をモチーフにしていることが想像できる。象徴的な表現が多用しながら、明け方から星の出る夜までの1日を扱っている。そしてこの詩を頁の上半分に掲載されたクリンガーの版画と関連付けるために、天界から火を盗んで人間に文明をもたらしたプロメーテウスをクリンガーに擬えている。英雄や賢者が死んで冥府に赴くときには、ヘルメースが直々にお迎えに上がるとされているので、詩と関連付けられた上

記版画は、死したクリンガーがヘルメースに抱えられて冥界に連れられて行く場面と読み替えられるであろう。

ラングハインリヒの詩はクリンガーの葬儀をモチーフにしていると述べたが、それを裏付ける、葬儀の様子を記録した記事がある。1920年7月16日付けの『ナウムブルガー・ターゲブラット (ナウムブルク日報)』である。少々長くなるが、この詩が成立した背景を理解するために訳出しておく¹⁸。なお、[]内は筆者の注である。

クリンガーが埋葬される午後、変わりやすい天気シンフォニーの交響曲が轟き始めた。無数の雷が閃き、長く轟く雷、重く砕けるような衝撃は全自然を震わせ、一撃ごとに水の塊が降りてきて、どんよりとした空は明るくなる気配すらなかった。葬儀の時間になり、辺り一面の雷雨が静まり、嵐が治まってきた。参列者が高台に集まると、雷による火事の煙の暗雲が立ち込めていた。式典の最中も雷がうつろに轟いていた。クリンガーが雨水樽として使っていたイタリアの大型ワインアンフォラから水が溢れ出していた。土留めされた彼の墓穴からは、大量の水を取り除かねばならなかった。モミの木と繁茂した松に囲まれたこの場所は、彼が息抜きをしていた場所で、ウンシュトルート川とザーレ川の谷の眺めは素晴らしかった。

クリンガーの棺は、驚くほど飾り気のない仕事部屋に置かれている。その仕事部屋には、白い人物で飾られた緑のタイル張りの暖炉があり、それ自体がこの芸術家のユニークな作品となっている。ここで、グロースイエーナの司祭で教区監督役員のピカートが弔辞を述べる。その中で彼は偉大な芸術家について語りながら、神が私たちに与えてくださったものを、そして彼に近い人々だけでなく私たち全員が彼の死で失ったものを、見事に心と精神に呼び起こしてくれた。クリンガーが長椅子に横たわりながら死を迎えた閉め切ったガラス張りのベランダの前は、墓地に向かう途中に捧げられた素晴らしい花輪や棕櫚の葉であふれている。ライプツィヒ市の色、青と黄色がよく目立っていた。

貴重な献花(親戚、多くの芸術家団体、ミュンヘンの「ユーゲント」、ニーチェ・アーカイヴ、および既にある庭の花をいっそう華やかにしてくれたその他の多くの人からの献花)の中には、(すでに述べたものと同じ数の、ナウムブルクのゲオルク・マテスが作った)市の色のリボンが付いたナウムブルグ市の花輪もあった。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス(クリンガーの友人ユリウス・クレンゲル教授率いる)の音楽家たちによる高らかな音楽が、想像を絶する素晴らしい演出で式典に捧げられ、棺が家から丘の上にある見晴らしの良い墓地に運ばれた。唯一の装飾であるオークの葉でできた大きな金色の花輪を頭のところに載せた黒塗りの重厚な棺は、薄紫色の布で包まれていた。棺の前には、故人が会員で祝賀者だったライプツィヒの軍人会107の旗が掲げられる。

クリンガー夫人[ゲルトルート]は、クリンガーの大切な友人で画家の[アルテュール・]ハーファークーンと一緒に、棺の後ろをゆっくりと歩く。棺の上に、この芸術家の最も尊い勲章が見られる。ゲハイマー・ホファールト[称号]で医学及び哲学名誉教授のマックス・クリンガーは、騎士団の騎士プール・ル・メリット勲章を、バイエルン・マクシミリアン科学芸術協会勲章を、ザクセン・アルブレヒト勲章のコムトゥール[騎士修道会会員]を、高

18 以下より引用した。https://www.mv-naumburg.de/klingers-grab(最終検索日:2021年1月8日)

ザクセン・ワイマール勲章を授かっており、外国のアカデミーや芸術家協会の名誉会員だった。これらは、他の人と接するうえでの偉人の証の一つとして単純さそのものであり、自分の名前と呼ばれることを好んでいた人の大きな対外的名誉だった。

今、巨匠が横たわる棺は墓穴に降ろされ、雨の滴が落ちて、うつろな雷鳴が鳴り響いていた。司祭が祝福の言葉と主の祈りを唱え、その後、花輪を置く人たちの長い弔辞や短い弔辞が滔々と続いた。最初に登場したのは、ライプツィヒ大学を代表して、ゲハイムラート[称号]教授のシュトゥドニツカ博士で、彼はクリンガーによる大講堂の素晴らしい大壁画に謝辞を述べた。洗練された長目のスピーチの中で、彼は人や友人としてばかりか美術研究者としても、故人の芸術的な偉大さと仕事の喜びについて、非常に魅力的な説明をしてくれた。あまりにも早く、巨大な人格と強大な創造力が失われてしまった。しかし、今、私たちは彼が与えてくれた偉大なものに感謝しなければならない。これが絶妙な結びの言葉だった。彼自身が選んだこの美しい地球の上に、今彼が安らかに眠ることが出来ますように。彼の靈魂が、我々民衆の守護靈の一つとして、真っ暗な夜からより良き日へと我々を導いてくれますように。

ライプツィヒのローテ市長はこう述べた。ライプツィヒ市は、その偉大な一人の息子の棺を見て、深い悲しみに暮れています。ライプツィヒは彼の創造の中心地であったこと、そしてそこから彼の傑作が世界中に広がっていたことを誇りにしています。病氣と死は、私たちがより多くのことを成し遂げるのを妨げてきました。リプシア [ライプツィヒの擬人] は哀悼して巨匠の墓に頭を下げます。彼女 [リプシア] は賛美と感謝、そして誇りと誠実さの中で、彼の足元に月桂樹を置きます。魂が安らかに憩われんことを。ライプツィヒ美術館を代表して、教授のユリウス・フォーゲル博士は彼の作品に見られる不滅の天才に敬意を表し、33年の長きにわたる親交のあった画家の墓に月桂樹を捧げる。彼が創造した全てのものに感謝し、ドイツ語が聞こえてくる限り彼の名前が消えることのないこの世界から最後の挨拶をする。

さらに、ライプツィヒのゲハイムラート[称号]教授リヒトは、前の人がベルリン分離派からの花輪を捧げている間、ベルリン美術アカデミーを代表して話をする。女性初の教授になったベルリンの偉大な芸術家ケーテ・コルヴィッツが、亡くなった巨匠に別れと感謝の言葉を述べた。シュテール教授はドレスデンのアカデミー評議會を代表して、ライプツィヒのヒルツェル博士は、マックス・クリンガーが設立したヴィラ・ロマーナ財団を代表して、カルクロイト伯爵はドイツ美術家連盟を代表して、ライプツィヒ・グラフィックアート・アカデミーを代表してツォイラー博士が、ライプツィヒ年次展を代表してライプツィヒのヨハネス・ハルトマン教授が、工芸協会を代表してホルラート・ドレヒスラーが、ミュンヘンの『ユージェント』を代表して、ミュンヘンの作家ラングハインリヒが弔辞^{マイスター}を述べた。青年会の代表として一人の青年が新緑の枝を掲げ、オークのこずえで飾られた巨匠に最後の挨拶をする。

若者を代表して、さらに最後の一人が亡くなった巨匠に弔辞を述べる。あなたの才気を感じています。彼が亡くなった時、この辺りをいかに自然が猛威を振るったのでしょうか、今日から巨人たちの戦いが再び始まりました。それはあなたの力が形を変えたものです。でもあなたは生きている、私はそれを感じることができます。彼は預言的に語る—この場

所は、われわれ国民がまた休息に訪れるきっかけになると。我々国民はあなたの作品から再びこの力を与えられるでしょうし、あなたの芸術を通じて国民は再び思い出でしょう。名前を挙げた人たちの他にも、多数の列席者の中には注目すべき人たちがいた。シュテッテンハイム博士、工芸博物館館長のグラウル教授、出版社のゼーマン、版画・製本アカデミーの教授たち、ホルスト＝シュルツェ教授、郡手工業組合長のランゲ、建築監督官のビューリング、彼らはライプツィヒから来ていた。ライプツィヒ市長は自動車でやって来た。ナウムブルク市からは多くの人が、とりわけディートリッヒ市長、枢機卿会議議長D.グラージェヴァルトなど、さらに何人かのナウムブルクの人たちとケーゼンの婦人たちが代表だった。グロースイェーナからは、区長と参審員が出席した。弔電はベルリン、ドレスデン、ウィーンなどの市長から、ウィーンのアカデミーなどから届いた。ベルリンの「メスター・ボーヘ」の報道のための映画撮影は、ライプツィヒのジグナルフィルム社が手配し、我がナウムブルクの巨匠ヴォレシャックが記憶に残る映像を記録した。ライプツィヒとベルリンからは多くの報道記者が列席していた。

墓碑として、巨匠クリンガー自身が制作した等身大を超える黒大理石の彫像《アスリート》が設置されるでしょう。彼は今もライプツィヒのアトリエにいる。

この記事によって、葬儀の当日は天気が悪く雷も鳴っており、雷による火事も見られたことがわかる¹⁹。ランゲハインリヒの詩の中では火、松明、灯火、炎など火に関わる言葉が頻出しており、プロメーテウスと火は切っても切れない関係にあるとはいえ、葬儀でも現実の火が見られていたたわけである。

詩の最後から2番目の連(13連)に、「彼女が暗い土の底に棺を花と涙で送った時」という記述がある。「彼女」はもちろん未亡人のゲルトルートのことであり、クリンガーにこの詩を捧げつつも未亡人であるゲルトルートもさりげなく登場させている。ランゲハインリヒはこの号を通じてクリンガーに対する「友情の証」を示してくれたので、そのお礼としてゲルトルートは「愛しきマックスへの友情の証」として、ランゲハインリヒにこの油彩小品をこの時期に贈ったのだろう。

風巻氏による購入の経緯

《女性の肖像》は、1981年6月にハンブルクのハウスヴェデル&ノルテで開催されたオークションに出品されている²⁰。筆者が2017年9月2日に初めて風巻孝男氏宅を訪問して遺品の作品調査を行った際²¹、上越教育大学の阿部靖子教授から、「絵は風巻氏がドイツに滞在中に100万円で購入したと風巻氏のお姉様がおっしゃっていた」という話を聞いた²²。風巻氏の履歴書によれば、氏は1980年12月から翌年10月まで、文部省派遣在外研究員と

19 天気の悪さについては、「葬儀の日が自分の誕生日」で「4番目に弔辞を述べた」コルヴィッツも「埋葬の前のちょっとした間、ひどい悪天候になった」と日記に書いている。Jutta Bohnke-Kollwitz (Hrsg.), *Käte Kollwitz, Die Tagebücher*, Berlin: Wolf Jobst Siedler Verlag, 1989, S. 801-802.

20 *Aukt. -Kat. 239, Hamburg, Hauswedell & Nolte, Moderne Kunst, am 12 und 13. Juni 1981*, Lot 748.

21 同行者は風巻氏の大学時代の先輩にあたる星山信也早稲田大学名誉教授と風巻氏の同僚であった上越教育大学の阿部靖子教授。阿部氏はご遺族から遺品の美術品の管理と処分を一任されていた。

22 この発言内容に間違いがないか、2020年7月3日に阿部氏に面会した際に再度確認した。

してハンブルク・クンストハレで研究をしている²³。ハンブルクのハウスヴェデル&ノルテでオークションの行われた1981年6月に、風巻氏は確かにドイツ（ハンブルク）に滞在しているので、在外研究員としてドイツに滞在中に購入したのは間違いなく。また、オークションカタログによれば、エスティメイトが15,000マルクなので、当時のレート（1DM≒98）で換算すると約150万円になり、安く落札できたのだと考えれば、100万円で購入したという話も納得がいく。

風巻氏が実際にオークション会場を訪れていたと推測される資料がある。A. Duckers, *Max Klinger*は2018年3月22日に愛知県美術館に運び入れた洋書の一冊で²⁴、その中にハウスヴェデル&ノルテの239号(1981年)から切り取った扉(表裏)と95-96頁(表裏)、図39-40頁(表裏)の3葉が挟まっているのを同年4月13日に発見した。96頁は当該作品についての記載がある頁であり、図販の39頁には当該作品のモノクロ写真が掲載されている。当該作品の記述がある部分は中央に垂直の線が引かれ、左欄外に“Oben”(上に)と書き込みがある(図8)。その前の頁はFritz Klimschの3点の記述があり、同様に真ん中に垂直の線が引かれ、右欄外にそれぞれ“Werkesaal”(作品ホール)と書き込みがある。これらの書き込みは、どうやら場所を示しているようである。つまり風巻氏はオークション会場で、作品が展示されている場所をカタログに記入しながら見て回ったのだと推測される。当該作品の欄外に記された“Oben”は、会場の下の階に展示されていたことを示すものであろう。

購入後の詳細は不明だが、初めて風巻孝男氏宅を訪問した2017年9月2日には、壁に掛けられていた(図9)。おそらく購入後は自宅にずっと掛けていたものと推測される²⁵。

制作の手順——表面の観察から——

ピンクのブラウスを着た女性を4分の3正面で少し下から捉えた肖像画である。描かれている素材は板で、画面下の部分には絵具が塗られていない板目が見えている。画面は全体的に明るく、陽光の下で描かれたかのように見える。筆触を残さずに丁寧に仕上げていくわけではなく、顔の部分は細かな筆触で塗られており、その他の部分(背景や衣服、髪や首)は大きな筆触が使われている。そのため、完成された作品というよりはスケッチ的な印象を与えている。首から左肩にかけての部分には、表面の絵具層の下に方向のまったく異なる筆触が確認できる。また、その首から画面右端の背景に濃い水色が塗り込ま

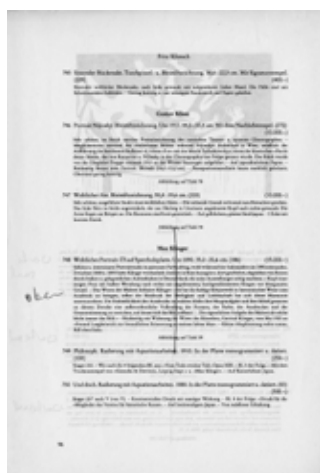


図8 『ハウスヴェデル&ノルテ』239号、近代美術、1981年6月12-13日、96頁

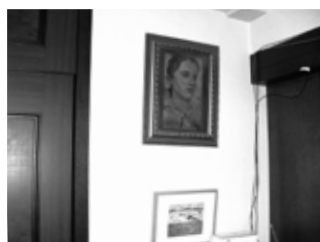


図9 風巻氏宅に飾られていた《女性の肖像》(2017年12月8日、2回目の訪問時に撮影)

23 風巻氏の履歴については、阿部氏より資料を提供いただいた。

24 風巻氏が所蔵していた洋書は、愛知芸術文化センターのアートライブラリーの蔵書とすべく順次移管を進めている。

25 作品の額のガラス面がかなり汚れており、風巻氏がヘビースモーカーであったという阿部氏の証言もあり、この推測はかなり妥当性があるように思われる。

た部分まで帯状に、下層に白に近い水色が他の部分よりも厚く塗られている。さらに、髪の毛の部分は背景と同じ水色の下の層が所々に見えている。また、この女性の顔は左右対称になっていない。顔の右側の明るい部分は後から塗り足しているように見える。

以上の観察から制作の手順を推察すると、以下ようになる。最初に今の画面で背景に塗られている水色が下地としてかなり広範囲に塗られた。場所によってはほぼ白に近い色が使われた。同時にあるいはその後に顔の左側を中心に顔が描かれた。その時女性は（左側だけだが）黒っぽい服を着ていた。最後に、髪の毛や右耳が描かれて、顔の明るい右側部分に手加えられ、服もピンクになった。

板の大きさ

《女性の肖像》の制作年は1890年頃とされているので²⁶、クリンガーのローマ時代（1888-1893）の制作となる。当該作品は縦長の柾目の板に描かれており、縦35cm、横20.6cmである。

クリンガーがローマ時代に制作した油彩の人物画で、板に描かれた作品で最大のものは、《ヴァイオリニスト》（1891年、フォルクヴァンク美術館、エッセン、図10）である。《ヴァイオリニスト》は縦横のサイズが68.5×46.5cmで、縦横ともに当該作品の約2倍の寸法になる。換言すれば、《ヴァイオリニスト》の板を四分割すると、およそ当該作品の寸法になる。しかし図版で見る限りでは《ヴァイオリニスト》の木目は横に通っているので、単純に4分割したものとは言えない。

同じく板に描かれた《ビアンカ》（1890年、ライプツィヒ美術館、図11）の縦横のサイズは46×37.7cmで、《ヴァイオリニスト》の約半分の寸法になる。しかも《ビアンカ》の木目は縦に通っているので、板の厚みを考慮しなければ《ビアンカ》は《ヴァイオリニスト》と同じ寸法の板を単純に半分にして使ったものと言える。

《ビアンカ》とほぼ同サイズの板に縦絵で描かれたローマ時代の油彩画に、《左向きの少女像》（1890年頃、ライプツィヒ美術館）、《クリンガーのアトリエからサンタ・マリア・マジョーレの眺め》（1889年、ライプツィヒ美術館）がある。前者の木目は定かではないが、後者の木目は《ビアンカ》同様に縦に通っている。少なくとも以上5点の板の作品を比較する限りでは、一番大きな《ヴァイオリニスト》のサイズの板（68.5×46.5cm）を基準にした場合、縦を3分割すると22.8cmとなり、当該作品の横の長さになる。つまり、当該作品は《ヴァイオリニスト》と同じ板を横に3分割し、長辺を10cm程度切り落した板が使われたものと推測できる。



図10 《ヴァイオリニスト》
1891年、フォルクヴァンク美術館、エッセン



図11 《ビアンカ》1890年、ライプツィヒ美術館

26 Aukt.-Kat. 239, op. cit., Lot 748. 当館では現在のところ、このカタログに記された制昨年を踏襲している。女性の左のこめかみあたりや口の左側の陰になった部分などに青系の色を置いていることが確認できるので、少なくともパリ時代(1883-86年)の印象派体験以降であることは間違いない。

残された問題——終わりにかえて——

ゲルトルートがラングハインリヒに《女性の肖像》をなぜ1921年5月という時期に贈ったのかについては明らかにできたが、なぜ他でもなくこの作品を贈ったのかという点については残された問題として、今後も考察を続けていく必要がある。この問題は、描かれたモデルが誰なのかという問題とも関連しており、制作年とも関連してくる。制作年に関しては、様式的に見てもローマ時代(1888年2月～1893年2月)であるのは間違いないであろう。モデルに関しては、この時代に描かれた何点かの肖像画のモデルとなったコルネーリア・パツカ＝ワグナーの可能性が高いと筆者は考えている。モデルが同定されれば、なぜ他でもなくこの作品を贈ったのかという問題についても、ある程度の理由が説明できるのではないかと推測している。残された問題については稿を改めることとしたい。

(資料)

CATALOGUE

Title: Portrait of a Woman/ Weibliches Portrait (DE)

Date: c.1890

Medium: oil on plywood

Dimension: 35.0×20.6cm

Inv. no. : FO202000001000

Provenance

Succeeded from the artist by Gertrud Klinger, July 4, 1920;

Franz Langheinrich, May 1921 (gift by Gertrud Klinger);

Auction: Hauswedell & Nolte, 12-13 June, 1981, No. 748;

Prof. Takao Kazamaki, Joetsu University of Education, Joetsu City, Niigata Pref., Japan, until 18 May, 2017;

(Under control of Prof. Yasuko Abe, Joetsu University of Education, Joetsu City, Niigata Pref., Japan.)

Acquired in March 2020 by Aichi Prefectural Museum of Art (gift by Houji Kazamaki, successor of Prof. Takao Kazamaki).

Exhibition

Collection exhibition III, 19 Sep.-6 Dec., 2020, Aichi Prefectural Museum of Art

Collection exhibition IV, 15 Jan.-11 Apr., 2021, Aichi Prefectural Museum of Art.

Literature

Aukt. –Kat. 239, Hamburg, Hauswedell & Nolte, *Moderne Kunst, am 12 und 13. Juni 1981*, Lot 748: Max Klinger *Weibliches Portrait*, Öl auf Sperrholzplatte, Um 1890, 35.0x20.6cm, (Schätzpreis 15,000,-DM, Einfabr. Tafel 39.)

謝 辞

本作品を含めクリンガーを中心とするドイツ版画の一大コレクションをつくりあげた故風巻孝男氏に感謝する。本論を執筆するにあたり参照した文献は、ほとんどすべて氏の旧蔵である。美術品はもとより氏の残されたこうした文献資料も合わせて頂戴できたのは、氏の大学の同僚であった阿部靖子氏のご尽力のたまものである。あわせてここに感謝する。

[図版出典]

5 https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/jugend1907_1/0167

6 <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/jugend1921/0309>

7 <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/jugend1921/0310>

10 <http://collection-online.museum-folkwang.de/eMP/eMuseumPlus>

11 Dieter Gleisberg (Hrsg.), *Max Klinger 1857-1920*, Leipzig: Edition Leipzig, 1992, S. 251, N. 266